

歴史

歩・歩・歩
さんぽ

口マシを伝える

31のストリート物語

名島・多々良

名島・松崎地区
歴史ガイドマップ



名島・松崎地区ガイドマップ・2021年
さんぽ会《名島グループ》

愛称マップ31（名島地区）

平成19（2007）年に名島校区自治協議会では、「歴史の街づくり」をめざし、名島・松崎の古い道路や史跡へ通じる道路に親しまれる愛称を募集しました。平成20（2008）年に名島公民館にて、名島校区語り部の会の尽力で名島、松崎の古い通り（道）の愛称パネル（標識）が作製されました。



① 妙見通り	② 帆柱海岸通り	③ 帆柱通り	④ 黒崎海岸通り
⑤ 弁財天通り	⑥ 七兵衛屋敷通り	⑦ ダンペ弁天通り	⑧ 城山道
⑨ リンドバーグ通り	⑩ 発電所通り	⑪ 飛行場道	⑫ 船頭町通り
⑬ 引き込み線通り	⑭ 羽衣台道	⑮ 内堀通り	⑯ 潮汲み道
⑰ 岩見重太郎通り	⑱ 大名通り	⑲ 渡場道	⑳ 高射砲陣地道
㉑ 桃山道	以下松崎・多々良地区へ続く		

ガイドテキストの■印は、ご案内する通り（道）の地域内にある観光スポットです。

名 島 地 区

(ガイドテキストを参照しながらご覧ください)



名島は、昭和30（1955）年福岡市に編入され、平成27（2015）年還暦を迎えましたが、その前は糟屋郡多々良に属していました。

1400年代までの名島の地形は名島・櫛島・内陸半島地に三分されていたと、『海東諸国紀（かいとうしょこくき）』応仁2（1468）年に見えます。さらに、島の太守（藤原縄繁）が李氏朝鮮と盛んに交易していたとあります。このような地形をう

まく利用して1500年代に立花城主立花鑑載（あきとし）が立花城の端城として、天文年間に名島城を築城しました。

天正16（1588）年、秀吉によって転封を命じられた小早川隆景が、立花城からこの名島に新しく築城して移り、そこを拠点としました。小早川家の統治期間は13年と短いですが、この間、名島は筑前国の「首都」でありました。

No. 1 妙見通り

名島神社社領の「妙見島」への道、昭和20年代までは干潟時のみ島へ渡る事ができました。

みょうけんじまのちゃかい ■ 妙見島の茶会

小早川隆景が名島城普請の陣頭指揮をしている所へ、博多の豪商神谷宗湛や嶋井宗室らが普請見舞いに酒や肴を進上し、妙見島の海岸で酒盛りを開いたといわれています。



たいこうひでよしこうちゃゆういどのあと 6● 太閤秀吉公茶遊井戸の跡

所在地 東区名島1丁目（旧妙見島）

秀吉公、名島にてこの島で茶遊会を開き、その時に使用した井戸の跡が今も現存しています。

この碑はマンション駐車場と隣との狭い境界のフェンス際にあります。

No. 2 帆柱海岸通り

No. 3 帆柱通り

昭和9年国指定天然記念物「帆柱石」に因んだ名。名島城（天正16（1588）年～慶長7（1602）年）築城時には「小早川隆景公」がこの浜辺で茶会を催しています。

2● ほぼしらいし 帆柱石

所在地 東区名島1丁目

帆柱石は樫属の桂化木であり、土中に埋もれた樹木に珪酸がしみ込んで木の組織と入れ替わり化石となったもので、第三紀層（6400万年から170万年前）



にできたといわれ、昭和9（1934）年5月、国の天然記念物に指定されました。

伝説では、神功皇后が三韓から帰還された時の船の帆柱が化石になったものとされ、帆柱石の名称の起源となっています。

なお、満潮時には水没することがありますので、潮見表などで干満などを確認してから行かれることをお勧めします。

No. 4 黒崎海岸通り

黒崎浦とも言われ、「神功皇后」が三韓へ御出立された地と伝えられている。

まないたせ あねいし ■ 砧板瀬（姐石）

ご凱旋のとき、諸軍勢とこの上で祝宴をしたと伝えられる。

えんのいし ■ 縁の石

この岩より船に上られたとされる。



No. 5 弁財天通り

「名島神社、弁財（才）天」の通りです。

No. 6 七兵衛屋敷通り

名島城の「御用商人七兵衛」の屋敷跡。

No. 7 ダンベ弁天橋通り

名島火力発電所（大正9（1920）年～昭和35（1960）年）へ石炭を運んでいた船「ダンベ船」の船溜りがありました。発電所への引き込み水路があり、「弁天橋」が架かっていました。

No. 8 城山道

名島城の「本丸」がありました。

4●なじまじょうし名島城址

所在地 名島1丁目



名島には大友氏の家臣、立花鑑載が天文年間（1532～1555年）に築いた立花城の支城がありました。天正15（1587）年秀吉の九州平定後、小早川隆景は筑前国主となり、不便な立花城に代わって名島城を築きました。

「筑前国続風土記」によれば「此所に立花鑑載が築きし立花の端城あり。天正15年秀吉公西征し、その年の夏、筑前国及び

筑後国のうち二郡(略)肥前のうち二郡(略)を小早川隆景に給わり、九国の押さえとし給ふ。(略)隆景の城地をば名島に築くべしとて、秀吉公みずから経営有て要害を定められる。同16年2月25日城営作の事始あり。」と記されています。

秀吉公は文禄元（1592）年には朝鮮出兵のため設けた肥前名護屋城へ赴く途中、4月21日名島城に入城し、3日間滞在、この間博多町衆との要談も行われたといわれています。また、「慶長5（1600）年東照宮、此国を長政に給わり、(略)長政其年の冬入国て此城に住まふ。然るに(略)城下の境内せばくして、久しく大國の地を守るの地に非ずとて(略)翌年より福岡に城を築かる。これに依て名島の城の石壁樓等悉く崩して福岡に運漕せり」とあります。慶長7年、長政は福岡に移り、名島城は廃城となりました。

名島城は、福岡市教育委員会によって、平成2年の第1次から第4次にわたる調査が行われ、隅櫓跡と瓦、本丸大手（東面）の石垣、本丸北側の建物跡などが確認され、現在は、名島城址公園として市民の憩いの場となっています。

■なじまじょうしこうえん名島城址公園



名島城址公園の名所「臥龍桜」

名島城の遺構

①名島門（脇門）

現在：福岡市中央区城内

この門は、黒田24騎の一人、林掃部（かもん）に下げ渡され、邸宅の門として使用されていたものです。明治の中ごろ、長崎に移築されそうになりましたが、当時の代議士平岡浩太郎氏によって買いもどされ、福岡天神にあった自宅の門として使用されていました。戦後富士ビルの建設に伴い、平岡浩氏（浩太郎氏の孫）によって現在地に移されたものです。



①名島門

②唐門

現在：福岡市博多区千代 崇福寺境内

これは正面が唐破風の向かい唐門といい、慶長年間（1596～1614年）に崇福寺に移築されたと伝えられています。現在は黒田家の巴藤の本瓦葺きであるが、以前は桧皮葺（ひわだぶき）であったと言われており、本堂正面にあります。



②唐門

③搦め手門

現在：宗像市大穂^{おおぶ}宗生寺の山門

慶長5（1600）年に山門として移築したもので、一本のノグルミ（化香樹）の大木で作られています。寺の後方には小早川隆景の墓所があります。



③搦め手門

④名島城の切腹の間

現在：博多区中呉服町正定寺

名島城にあった書院で、天井の棧が床の間に直角になっている「切腹の間造り」となっており、柱は血が飛んでもシミが付かないよう黒く塗ってあり、すぐふき取れるように皮付きだったそうです。

名島引け

名島城の石垣や櫓等を始めすべての資材が福岡城の建設に充てられました。

5●なしまじんじゃ名島神社

所在地 東区名島1丁目

その昔、神功皇后が名島の黒崎海岸から三韓へ遠征される時、宗像三女神に無事を祈願されました。無事に帰還され、祈願成就の御礼として三女神を奉斎されたのが神社のいわれと略誌に記されています。また、出航に当たって海岸で将兵の名を呼び最後の兵の名をしめ切った、或いは船出する時軍勢の名を呼んだことから「名を呼ぶ島」とされたと地名由来としても伝えられています。

天正15（1587）年小早川隆景が国主として入国した翌年2月山頂に名島城を築くとき名島神社の社殿を海岸に移し、社領も付しました。元禄9（1696）年第四代黒田藩主 綱政公のとき浜に下ろした社を昔のように山に戻し、浜に鳥居を建てました。

現本殿は文政13（1830）年4月第10代藩主 斉清によって再建されたものです。



3●そうえいじ宗栄寺

所在地 東区名島1丁目25

島原の乱に黒田藩の武将として出陣した、岡田半左衛門利良とその子左右衛門正興は、寛永15（1638）年一揆との戦いの中で共に戦死しました。58歳と37



歳でした。

利良の妻は、夫の死後尼となり向春院となり、万治2（1659）年入寂。宗栄と追号されました。利良・正興父子は、御供所の妙楽寺に埋葬されましたが、戦で着用の甲冑・肌着は名島の古壘に納められて精舎が建てられ、利良の家臣手島半兵衛の次男で比叡山で修行していた真性坊俊道を開基としました。

宗栄寺は神宮寺の末寺でありましたが、明治初年神宮寺が廃寺となり弁財天は宗栄寺に附せられ別当寺を勤めることとなりました。

No. 9 リンドバーグ通り

名島水上飛行場に昭和6（1931）年「リンドバーグ（大西洋単独初飛行）夫妻」が世界一周の途上飛来しました。

7●なじますいじょうひこうじょうあとのひ名島水上飛行場跡の碑

所在地 東区名島1丁目

昭和4年8月、日本航空輸送(株)が名島に福岡支所を開設して、大阪との間に1日一往復6人乗り水上飛行機による定期輸送を始めました。

さらに中国の上海にもドルニエ飛行艇による定期空路が開かれました。

昭和6年9月17日リンドバーグは夫人と共に北太平洋空路開設調査のため、名島水上飛行場に飛来しました。初の外国人で



あり、開場して僅か2年目で、国際飛行場として外国機を迎え入れたのですが、時代は陸上飛行場を求めており、昭和9

年に閉鎖しました。昭和11年6月福岡第一飛行場として雁ノ巣に水陸両用の国際飛行場が開港しました。

No. 10 発電所通り

名島火力発電所前の道です。

No. 11 飛行場道

名島水上飛行場（昭和4（1929）年～昭和16（1941）年）への道、当初は木レンガ道でありました。

No. 12 船頭町通り

小早川隆景公の水軍の船頭達が住んでいました。

No. 13 引き込み線通り

名島火力発電所へ石炭搬入の引き込み鉄道線跡の道。

1●名島発電所の碑

所在地 東区名島1丁目

（名島西公園内に石碑があります）

起工は大正6年の予定でしたが、アメリカからの機材や材料の輸送が途絶え、翌7年の12月25日に地鎮祭が、翌8年5月7日に起工式が行われ、翌9年4月2日



第一期工
事の第一
号発電機
が竣工し、
最大出力
10,000kw
常時出力

5,000kwの営業運転が始まりました。引き続き二期工事が行われ、翌10年12月15日最大20,000kwの出力を出せるようになりました。

当時は大気汚染も問題にはならず高さ61mの大煙突2本から、昼夜を分かつともくもくと黒煙を吐く東洋一の大発電所が誕生しました。

大正11年7月九州電灯鉄道(株)が関西電気(株)と合併し東邦電力(株)となり、三期・四期と増設が進み最大出力40,000kwとなつて、煙突も名島で馴染み深い4本となりその威容を誇りました。東邦電力(株)から日本発送電(株)へ、更に九州電力(株)になって以来、終戦後昭和29(1954)年までは、ほとんど毎日運転していましたが、機械も古くなり昭和35(1960)年2月休止届けが出され、同年12月8日廃止の認可となりました。大正9(1920)年4月営業運転開始以来名島発電所は41年の歴史を閉じることになりました。



No. 14 羽衣台道

名島城のはるか以前に渡来人が住んでいました。その「渡来人の衣装」に因んだ名です。(二の丸跡)

No. 15 内堀通り

名島城の「内堀」がありました。

No. 16 潮汲み道

山道の崖下が海で潮汲みの場所でした。

No. 17 岩見重太郎通り

小早川家の剣豪「岩見重太郎誕生之地」に因んだ名です。

8●^{いわみじゅうたろうたんじょうのち}岩見重太郎誕生の地

所在地 東区名島3丁目23



名島城主小早川隆景の家臣、岩見重左衛門と言う剣術指南役の次男が重太郎で、大蛇退治・狒々退治など講談でお馴染みの武勇伝で有名です。天橋立で父の仇討ちを成就しています。叔父方の薄田姓を名乗り、薄田隼人兼相となって、元和元年(1615)年5月大坂夏の陣で豊臣方につき戦死しました。

■^{じんぐうじあと}神宮寺跡

名島城が小早川家の時には神宮寺があったが、明治に廃寺となり、その墓石群などがこの地に移された。

■^{がんとうひ}龕塔碑

神宮寺が廃寺となるまでの沿革を記した碑(昭和4年建立)

No. 18 大名通り

名島城の重臣達の屋敷がありました。

No. 19 渡場道

昭和初期まで多々良川の渡し舟の乗り場がありました。ここから松崎地区になります。

9●^{なじまばし}名島橋

起点・東区名島2丁目 終点・東区箱崎7丁目



福岡市東区の多々良川に架かる名島橋は九州の大

動脈国道3号線の道路橋として、1日約6万台の車の交通を支え、産業・経済・文化の発展に大きく寄与しています。

一方、白く輝く御影石で覆われた優美な姿は周囲とよく調和して、福岡のシンボルとして市民から愛されています。平成30



(2018)年には国の登録有形文化財(建造物)として登録されました。

橋は「なぜ？」 あんなに広いの・・・

昭和8年の完成から約90年、完成時はまだ自動車の幕開けの頃で、今日の激しい交通量は全く想像もできませんでした。それだけに、これ程のスケールの橋が造られた理由は何だったのか、いろいろの説が伝えられています。「軍用道路」として、また「路面電車を通すため」「代用飛行場」など諸説ありますがいずれも不明です。

しかし、産業の近代化が進む中、周辺では名島発電所稼働・水上飛行場開設・博多築港のための箱崎地先埋め立て計画等が進められました。この様な背景のもと、大正12年の関東大震災を教訓として名島橋が造られたと思われれます。ちなみに名島橋の前年（昭和7年）完成の新潟市の万代橋は、極めて名島橋とよく似ています。名島橋と万代橋は兄弟橋の縁組をしています。

今の橋で何代目？

その昔、文禄元（1592）年小早川隆景は朝鮮出兵に伴う秀吉の名護屋下向に備え、多々良川に橋を架けました。この橋は文政11（1828）年の洪水で流失、その後は渡し舟で川を渡っていました。明治43（1910）年地元有志の出資により総ヒノキ造りの木橋が完成し、不便は解消しましたが、木橋の補修維持は負担が大きかったようです。昭和8年名島橋開通により、木橋は撤去されました。

現名島橋は小早川時代から三代目ということになります。

No. 20 高射砲陣地道

戦時中福岡には都市防衛のために、高射砲部隊が置かれていました。一つが名島にありましたが、場所は明確ではありません。現在の名島4丁目の多々良川沿い、上流に向かって左手の小高い丘へ伸びる道沿い、ここからは名島城、千早、香椎方面の見晴らしの良い場所です。

No. 21 桃山道

名島小学校から陣の越にかけての高台は古くからの住居地で、古代の遺跡も発見されています。この桃山道は高台の地形を生かして、昔は果樹園が広がっていたことから付けられたそうです。

No. 22 かめ焼道

多々良川東岸から河岸段丘の丘陵をのぼる道で、古い時代にこのあたりで甕を焼いていたことにちなんでいます。古くからの通りの名残りは道沿いにある古い木からもわかります。

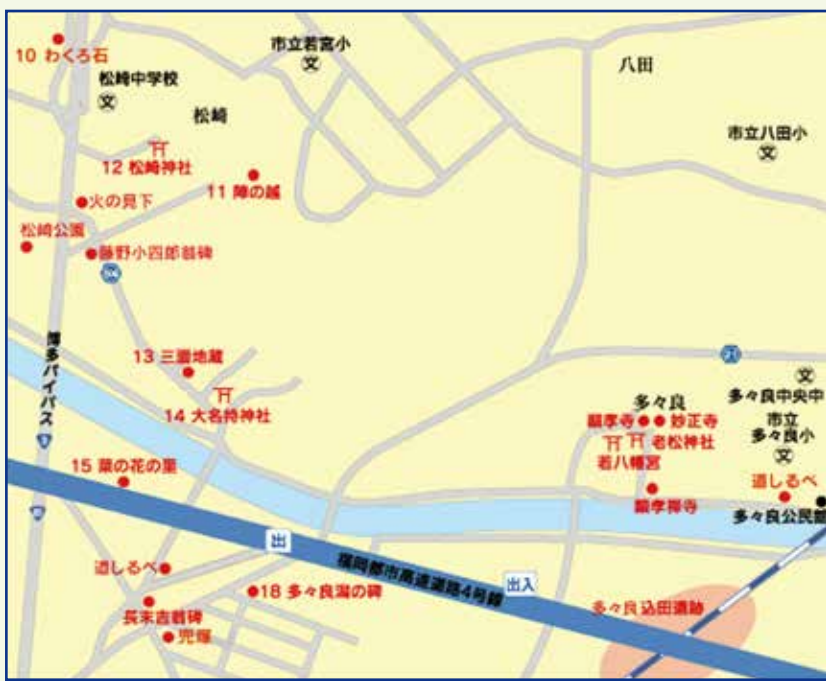
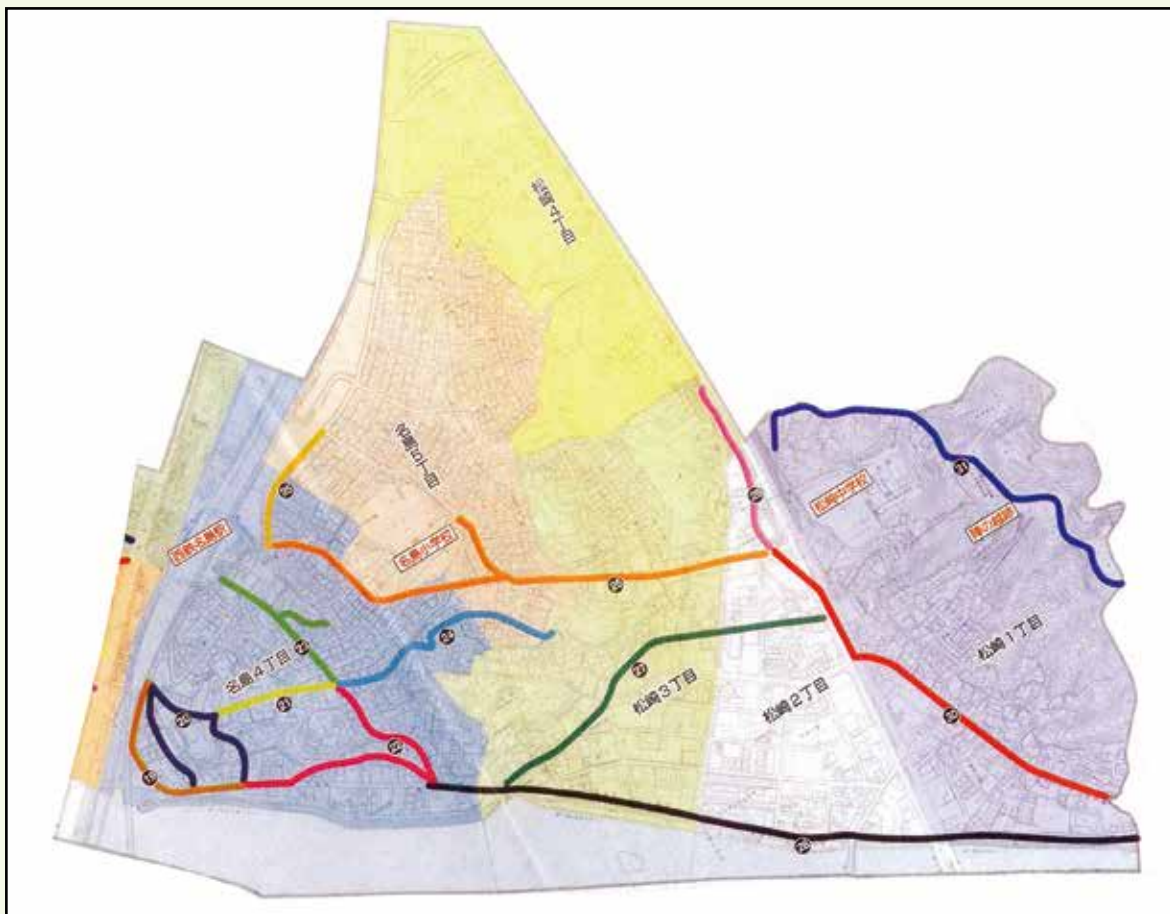
No. 23 こうまたみち 高又道

高又道の看板は高又地藏尊の近くにありません。この近辺は今は住宅街ですが、古くは松崎本村へ抜ける道でした。地藏尊は道路のすぐ脇にあり、今も大切に信仰されています。石の風化の状態から江戸時代以前であろうと推測されます。

No. 24 いぼ地藏道

いぼ地藏道は名島小学校の道の反対側の高台の頂上付近にあります。古くからご利益の高いお地藏様として有名で地元では篤く信仰されてきました。

愛称マップ31 (松崎地区)



道の愛称

②かめ焼道
③高又道
④いぼ地藏道
⑤岩名池道
⑥学校道
⑦本村道
⑧松崎往還
⑨蓮華坂 (旧唐津街道)
⑩今屋敷道 (旧唐津街道)
⑪陣の越道

No. 25 岩名池道

通り名の由来は以前、岩名池というため池があってそこから付けられ、小字名岩名とあります。名島台から(西鉄名島駅の南側)線路側の通りの一部に公園が設置されています。

No. 26 学校道

名島小学校への通学路、松崎の3号線バイパスを進み、蓮華坂を越えて松崎中学校から名島小学校へ抜ける道。昔はうっそうとした杜の中を通る学校道でした。

ぜんぼうこうえんぶん なじまこふん
■ 前方後円墳・名島古墳



名島古墳出土の三角縁神獸鏡

名島小学校の南80mの丘陵地(名島4丁目)、多々良川河口の丘陵頂部(標高

39m)で、宅地造成時に発見され、昭和54(1979)年に第1次調査、昭和61(1986)年に第2次調査で全長30mほどの前方後円墳であることがわかり、名島古墳と命名されました。

発見された鏡の破片は三角縁神獸鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)といわれ、「三角縁九神三獸鏡」と分類されています。この鏡と同じ図像の鏡は、これまで二面確認されています。奈良県都祁村白石光伝寺裏と愛媛県今治市桜井の国分古墳です。これは卑弥呼が魏から送られた鏡の有力な候補になっています。銅鏡は卑弥呼の没後、

各地の首長に配布され、後に彼らの墓に副葬されたようです。鏡面に付着した繊維や朱から、鏡は布に包まれていたようです。

この古墳は博多湾を見晴らす景観から対外交渉に関わった人物かもしれません。

No. 27 本村道

多々良川沿いの道から博多バイパス方面の旧松崎村を通る幹線通りでした。今も沿線には古いつくりの民家が少し残っています。昔の旧道を見ていると、幹線は2間幅の、支線は一間幅の道が多いように感じます。支線は大八車が引ける道幅を、幹線は馬や牛を引ける道幅を考慮しています。

No. 28 松崎往還

松崎往還は多々良川の名島渡し場から多田羅大橋まで多々良川沿いの道です。今の多々良川の河川敷にはジョギングロードが整備されていて市民の散歩道として愛されています。現在の多々良川には下流から名島橋、松崎橋、多田羅大橋と3つ架かっていますが、江戸時代には唐津街道沿いに多田羅大橋があっただけです。大橋を渡ると間もなく箱崎の宿でした。

No. 29 蓮華坂(旧唐津街道)

現在は千早方面から博多バイパスを空港方面へ走り松崎中学辺りの坂道です。その昔は唐津街道でした。旧唐津街道は、蓮華坂を通過して松崎の本村通りに入り多田羅大橋を渡って箱崎方面へいきます。博多バイパスの脇の小道は旧街道の一部で「わくろ石」があります。

10 ● ^{たちかえりのかみ}立帰りの神・わくろ石

所在地 東区松崎2丁目24

この付近は昔、多々良浜の東端に位置して蓮華が茂り、岩石が蓮華の花の姿をしているので此の坂を「蓮華坂」と呼びました。

その頃、農民は水利に苦労し、蛙の大将「わくろ」を祭って雨乞いの神としました。更に、立ち帰りの神として交通安全、疫病除けの神としても松崎村内の尊崇を集めました。

また、この近くは足利尊氏が多々良の合戦中、援軍を頼むとの書状を鎧の片袖に包んで送り、戦いを勝利に導いた所縁の地「片袖塚」、または「將軍使い」とも言われています。

この地点は、唐津街道に面していて一里塚が設けられており、福岡城を発して箱



崎に次ぐ二番目の里程標があった所と言われています。「藤野重善

書」の石碑裏面の説明から

12 ● ^{まつざきじんじゃ}松崎神社

所在地 東区松崎1丁目48-3

松崎稻荷は正面に「正一位稻荷大明神」の額が架かっています。それに菅原道真を祀った松崎天神社がありました。藩主も参勤交代の途次、参



拝したということです。大正末期頃、両社を合祀して松崎神社となり、香椎宮の末社となっています。

なお、松崎中学校の新築で、200m 移動して現在地に新築されました。

No. 30 今屋敷道

今屋敷道は千早方面から蓮華坂を越え松崎中学の先から左に折れる道、旧唐津街道の一部で旧松崎村の今屋敷地区のメイン道路でした。この道を進むと多田羅大橋に出ますが、明治以前はこの近辺で多々良川を越える橋はここだけだったようです。

■ ^{ふじのこしろろうおうきねんひ}藤野小四郎翁記念碑

明治初期から、牛馬を用いて田畑を耕す牛馬耕、その技術向上に関心が寄せられていました。始まったのが「競犁会（けいりかい）」です。競犁会とは、牛馬に犁（すき）をひかせて畦を作り、順位を競う大会です。多々良では明治13（1880）年に最初の競犁会が開催され、提唱したのが松崎の農家の藤野小四郎翁でした。翁は農業振興に尽力した人物で、農具発明者としても活動しています。

昭和8（1933）年には、その功績を称え、記念碑が建てられました。

14 ● ^{おおなもちじんじゃ}大名持神社

所在地 東区多々良2丁目-50

正徳2（1712）年4月18日建立。

その昔、多々良川辺り須崎（大橋・浜田）は景色の良い丘の上にあって、この社は大名持の



神（大国主命・大黒様）を祭っています。大橋・浜田の守護神として、また香椎宮の末社として今日に至っています。

^{さんめんじぞう}
13●三面地蔵（多々良川遭難者之碑）

所在地 東区松崎1丁目-18

この碑は明治6（1873）年6月、筑前竹槍一揆の犠牲者の慰霊碑です。



当時、大蔵省役人だった中村義心ほか2人は、福岡に派遣され、官吏と勘違いされ、無残にも殺害されました。この事件の殉死者の遺体が放置されたためか、

周辺地区では不幸災難が相次ぎ、そこで、明治30（1897）年10月、地蔵尊を刻んだ「三面地蔵之碑」が完成しました。その結果、災難も発生しなくなりました。

毎年3人の命日である6月21日には、慰霊祭が行われています。

^{たたらがたのひ}
18●多々良瀉の碑

所在地 東区多の津1-20

太平記や梅松論・宗像軍記によれば、この一帯は延元元（1336）年3月2日足利尊氏と菊池武敏ら天皇方の決戦場で、近くにあった花園の森を、民間では菊池方の墓地として祀ってきました。

また、この六の坪という小字は古代条里制の異



称で、構内からは中世以前の陶磁片が出土し、津屋の五山文学関係の顕考寺跡と共に文化史上の遺跡です。

なお、連歌師宗祇や関白豊臣秀吉らが通った瀉沿いの古道は、原田・浜田を経て香椎まで通じていました。

^{なのはなのさと}
15●菜の花の里

所在地 東区多の津3丁目

多々良川の流域一帯は、かつては菜種生産高において有数の地域でした。

福岡県内の菜種生産高は、明治の後半から昭和16年頃までの約40年間は、全国一位でした。（九州大学農学部資料）「菜の花」とはアブラナの花のことです。春には一面に黄色の花を咲かせ、まるで花園そのものです。

今ではその景色を見ることが出来なくなりましたが、能古島でそれを見ることができます。菜種は搾ると菜種油がとれます。



No. 31 陣の越道

陣の越は、南北朝の騒乱の時代に、足利尊氏が起死回生を賭けた戦いで、現在の松崎配水塔辺りに陣を敷き多々良川周辺で南朝方と戦い勝利した戦でした。この勝利をきっかけに尊氏は再び勢力を得て京都に進軍し、室町幕府を開きます。

11 ● 陣の越 じんのこし

所在地 東区松崎1丁目

筑前の国続風土記に「多々良大橋の東北なる山上に陣の越という所あり。これ足利尊氏香椎より出て此所に暫く陣を取り、多々良浜において菊池武敏と戦われしと言ひ伝えあり。」



尊氏は、初め香椎宮側の杉山に本陣を置いたが、さらにそこを出て多々良川の東方の小高い丘の上に本陣を移しました。いわゆる陣の越、今は松崎送水場がある場所です。ここからは多々良川一帯の戦場を一望の下におさめることができます。尊氏は陣の越から多々良浜に打って出ました。

■ たたらがた 多々良潟



■ 細川幽斎の歌碑

多々良川河畔、ふれ愛ロードに、「いにしえはここに鑄物師の跡とめて今もふみみる たたら潟かな」という歌碑があり

ます。この歌は戦国時代から安土桃山時代にかけての武将、戦国大名、歌人である、細川幽斎（ゆうさい）こと細川藤孝（ふじたか）が天正15（1587）年3月、豊臣秀吉が九州遠征した時、出陣から1か月遅れて海路にて出発し、陣中日記、紀行文『九州道の記』に残した歌です。法体（ほつたい）になった幽斎は、戦力として合戦に参加するわけでもなく、秀吉の陣中見舞くらの悠長な下向であり、途中、名所旧跡に親しみ、俳諧即興の和歌・連歌を詠み、秀吉と同席しては風流韻事を楽しむ雰囲気が記されています。記事の中に「香椎浦を通して、帰るときに船を多々羅の崎あ



細川幽斎の歌碑周辺

たりに寄せて徒歩（かち）にて行ける浜」とあり、多々良潟を記している。

■ ぜんべいいわ 善兵衛岩



松崎出身の「藤野善兵衛」の功績を伝えようとの願いから、元福岡市議会議員の藤野正人氏が昭和49（1974）年4月に建立されました。この地には昔、松崎稲荷神社のお汐井取り場がありました。

その遺跡を残し、またここには水難防除の不動明王を合祀されています。

その遺跡を残し、またここには水難防除の不動明王を合祀されています。

【名島・多々良地区全図】



第 第 第
4 3 2
版 版 版

令 平 平
和 成 成
3 27 24
年 年 年
2 7 2
月 月 月

出典

- 「日本名刹大辞典」 雄山閣
- 「福岡県百科事典」 西日本新聞社
- 「故郷名島の歴史」 故郷名島の歴史編集委員会
- 「松崎の歴史その群像」
- 「郷土史たたら」 郷土史たたら作成委員会
- 「平成17年度東市民センター歴史講座 “ひがし区歴史入門” 活動報告書」
- 「平成18年度東市民センター歴史講座 “ひがし区歴史入門” 活動報告書」
- 「平成元年6月発行 福岡市政100周年記念 ふるさと100年」 西日本新聞社
- 「国土交通省福岡国道工事事務所」

【お問い合わせ】

福岡市東区総務部 生涯学習推進課

☎ 812-8653 福岡市東区箱崎2丁目54-1

☎ 092-645-1144 FAX 092-651-5097

E-mail gakuhsu.HIWO@city.fukuoka.lg.jp

URL <http://www.e-sanpokai.rojo.jp/>

編集 発行
福岡市東区総務部 生涯学習推進課
東区歴史ガイドボランティア連絡会「歩歩歩(さんぽ)会」